

太田 誠 氏(元駒大野球部監督)の講演会開催される

5月29日、「球心いまだ掴めず ～自分史を書くヒント～」と題して、太田誠氏の講演会が浜松文芸館で開催されました。あいにくの大雨にも関わらず、会場の第1講座室に並べられた椅子は、ほぼ満席となりました。

ご自身の著書『球心いまだ掴めず』を書くに至った心や、自分史を書く上でのヒントを多々うかがうことができました。

また、野球人として歩んできた人生を語る中で、野球の奥深さはもちろん、人間としての生き方、人との出会いの大切さ等、示唆に富むお話でした。

終了後、書籍販売が行われましたが、太田氏のご厚意で、売り上げはすべて東日本大震災の義援金として寄付させていただきました。



文芸館の四季

今年の梅雨入りは例年より、10日以上も早いとか……。

文芸館の花々も「アジサイ」が主役になってきました。ここに来て色々な種類の「アジサイ」に出会うことができました。

右の写真は駐車場に咲いている「カシワバアジサイ」。葉が普段見慣れているアジサイとは随分違っていますね。この葉の特徴がその名前の由来でしょうか。花の咲き方もピラミッド状(円錐状)に花序が伸び、隣に咲いているアジサイとは形を異にしています。



駐車場入り口の斜面では、「ブラシノキ」が真っ赤な花を咲かせて、自己主張しています。この花の背景は梅雨時の曇天よりも真っ青な空が似合うような気がします。それにしても、この花を見て学校の理科室を連想するのは私だけでしょうか。

駐車場西側では、珊瑚樹の垣根を縫うようにして、「スイカズラ」が蔓を伸ばし、これもまた珊瑚樹の緑から浮き出たように、白や黄色の花をつけて私を惹き付けます。その可憐さ故に、漢字名を思うと愛おしさが募ります。私は、この花についてはカタカナで書くよりも、漢字が好きです。

ちなみにこの花の花言葉は「愛のきずな」「献身的な愛」「友愛」。(花言葉事典より)

お知らせ

- 和室に座椅子を3つ追加して配置しました。どうぞご利用ください。
- 当館では、省エネルギーの推進に対応するため、職員の勤務時における服装の軽装化を実施しております。何卒ご了承くださいますようお願い申し上げます。

藤枝静男が愛した言葉「観玄虚」

「観玄虚」って？

今、展示室で開催中の収蔵展「観玄虚」は藤枝静男が好んだ言葉ですが、彼はどんな場所でこの言葉と出会い、どのように解釈していたのでしょうか？

藤枝静男自身、「観玄虚」について、作品の中で次のように書いています。

大広間の広い床に掛けられた「観玄虚」の大軸を、私は懐しさと尊敬の眼で長いこと眺めていた。私ひとりにとっては、この書がむしろ訪問の目的となっていた。気負いも気取りも癖もなく、三つの大字が楷書で紙いっぱいに一筆一筆ゆっくりと真面目に、まったくの無私で書かれ、左上に「田翁」とだけ署名されている。書体にも運筆にも特徴はなにもない。書いた人の気持もわからない。感じが大きく、見ていると自然に暖い気分が湧いて量を増してくるよう思われるのである。

「田翁というのはどういう人だったのかしら」

「さあ、聞いておりません。わたしどもが参りました時はもうこの通りでした」

私は以前海雲さんから筆者のフルネームを教えられたことがあったが、じきに忘れた。その後訊ねると海雲さんも「田翁何と云ったかなあ」と首をかしげるだけで気に止めないふうであった。……(中略)……私は「観玄虚」という、この言葉もまた解らぬままに漠然と好きだった。時にはそれを頭に浮かべると心が安まり慰められて、一種の暗示さえ与えられることがあった。田翁は中国の人ではないかと思うこともあった。

私は、この言葉が韓非子の「解老第二十」というところに出ていると教えられて読んでみたことがあった。老子の「道の道とすべきは常の道に非るなり」という語を解釈する部分に出ている言葉で、本文には「観其玄虚」と「其」がはいっていた。其は道を指していた。つまり万有には固有の属性もなければ規制もない。何の存在規定もなく無条件に自由である。一定の在り方なんかない。要するに道というような不変の理は存在せぬということを飲込むがいい、という意味の言葉であった。漢文の教師から教わったのと変わりはない。

私には、ただこの三字の字づらから受ける懐かしいような怖ろしいような印象が、つまりぼんやりしたものが心にまつわりついて離れないのである。玄虚という文字から、私の行くてに空の空といったふうな透徹した真空状態は思い浮かばず、反対に光もまた失われてしまった無限の暗黒が見えるのである。私はほとんど視覚的に、つまり形容詞的にそれを感じ、ある場合にはそこに吸いこまれて泛うというような感傷的な空想に慰められたりすることさえあるのである。…以下省略

※漢字、送りがな等は原文のまま

『悲しいだけ 欣求浄土』講談社文庫収録 「庭の生きものたち」より抜粋

冒頭の「大広間」とは、東大寺塔頭「観音院」の広間のことを指すのだと思われます。文中に出てくる海雲さんとは「観音院」の住職、上司海雲（かみつかさかいうん）。文化人サロンを形成し、「観音院さん」という名で親しまれていました。

1925年（大正14年）に奈良に移住した志賀直哉を中心としたサロンが形成され、上司も出入りしていました。志賀直哉は1ヶ月ほど上司の観音院に逗留したこともありました。

小説中から、藤枝静男もここで「観玄虚」の3文字を直接目にしたことが伺えます。